

Ⅱ 遺 構

1 周辺の条坊関係遺構

1) **周辺の条坊関係遺構** 調査区が位置する右京一条一坊周辺では、これまでに第69-5次調査⁽¹⁾で一条大路、第60次⁽²⁾・65次調査⁽³⁾で一条条間路、第64次調査⁽⁴⁾で横大路、第64次・第69-10次調査⁽⁵⁾で西一坊大路、第64次調査で西二坊坊間路を検出している。また、榎原考古学研究所の調査⁽⁶⁾によって横大路が検出されている。各条坊遺構の概要は以下の通り。

一条大路 道路幅は現状で7.5m、南北両側溝間の心々距離は9mである。北側溝は幅1.9m、深さ0.3m、南側溝は幅1.1m、深さ0.2mの素掘溝である。

一条条間路 道路幅は現状で5.5m、南北両側溝間の心々距離は7mである。北側溝は幅1.5m、深さ0.2m、南側溝は幅1.5m、深さ0.3mの素掘溝である。両溝の堆積土から藤原宮期の遺物が出土している。

横大路 第64次調査で検出した南側溝は幅1.1m、深さ0.35mの素掘溝である。同調査では溝の北方10mまでの範囲を調査したが、北側溝は検出されず、道路幅は10m以上と推定されている。榎原考古学研究所の調査では第64次調査の東方で北側溝を検出している。溝は幅1.36m～1.81m、深さ0.18m～0.22mである。なお、同研究所ではこの調査区の西方約1.3kmの地点で、南側溝のみを検出しており、報告書では第64次調査で検出した溝を南側溝とすることに対して疑問を呈し、南北両側溝間の心々距離を約36.5mと推定している。

西一坊大路 第69-10次調査で検出した西一坊大路では、道路幅は現状で6.3m、東西両側溝間の心々距離は8.4mである。東側溝は幅2.3m、深さ0.4m、西側溝は幅1.6m、深さ0.35mの素掘溝である。第64次調査で検出した西一坊大路では、道路幅は現状で7.5m、東西両側溝間の心々距離は8.4mである。東側溝は幅0.9m、深さ0.3m、西側溝は幅0.9m、深さ0.1mの素掘溝である。いずれの側溝からも飛鳥Vの土器が出土している。

西二坊坊間路 道路幅は現状で6m、東西両側溝間の心々距離は6.5mである。東側溝は幅1.5m、深さ0.5m、西側溝は幅1.1m、深さ0.3mの素掘溝である。

2) **各条坊遺構の位置関係** 藤原京の条坊遺構は、その方位、道路間の距離とも、京全体で厳密に一定しているわけではない。したがって、条坊遺構の方位や条坊間の距離の厳密な検討は別稿に譲り、本報告では周辺の条坊遺構に限定した考察にとどめる。

条坊の方位 この周辺での同一道路で最も離れた2地点は、69-12次調査と64次調査で検出した西一坊大路の2地点である。この2地点から算出される道路の方位は国土方眼方位に対して、北で0度11分西へ振れている。また、第60次調査で検出した一条条間路の方位もほぼ等しく、この周辺での道路の方位はほぼ国土方眼方位に対して北で西に0度11分振れているとみる。

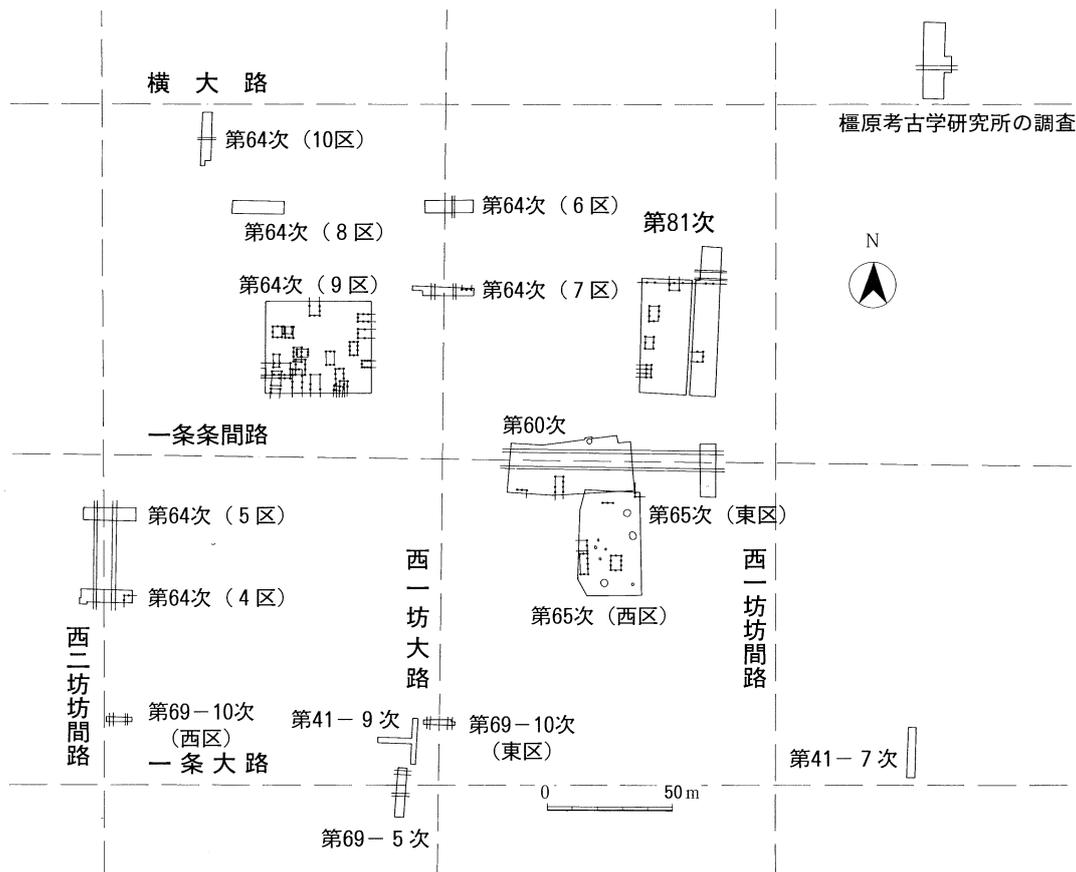


fig. 5 周辺の調査位置図

道路間の距離 上記の道路間の距離を、全ての道路の方位が国土方眼方位に対して北で西に0度11分振れていると仮定して算出すると、一条大路・一条条間路間が約129.2m、西一坊大路・西二坊坊間路間が131.6mとなる。一条条間路・横大路間は、64次調査検出の東西溝を横大路南側溝とすると142.8m、横大路の復原を橿原考古学研究所の報告書にしたがうと139.8mとなる。西一坊坊間路・西一坊大路間の距離は周辺の調査成果からは確定出来ないが、大路間の距離を750大尺とすれば、大路・坊間路間は134m程度となる。

第81次調査の位置 今回の調査区は坪内の東南部に位置する。坪の東西中軸線は、発掘区の西外側およそ10mの位置にあたる。南北中軸線は発掘区の北端、SD8658のやや南に位置する。

註

- (1) 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報23』1993年
- (2) 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報20』1990年
- (3) 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報22』1992年
- (4) 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報22』1992年
- (5) 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報23』1993年
- (6) 奈良県立橿原考古学研究所『新益京横大路発掘調査報告書』1993年

2 第81次調査の遺構

1) 層序 層序は、上に盛土が40～70cmあり、その下に水田耕作土(厚さ20～40cm)、床土(20～30cm)、暗灰色土ないし暗灰褐色土があり、地山にいたる。地山は、黄灰色の粘質土であるが、東区南端および西区東南隅の部分は灰色シルトである。暗灰色土ないし暗灰褐色土の層は、10cmほどの厚さで、調査区の全面を覆うものではない。同層には若干の遺物を含むが、この面から掘り込まれているのは近世以降の遺構である。遺構は基本的に地山面で検出した。遺構面は現地表下90～110cmで、標高約64.9～65.4mほどである。南東から北西に向かって緩やかに傾斜している。柱穴などは底が浅く、全体的に後世の削平をうけているものと判断される。

2) 遺構 検出した主な遺構は、建物9棟、井戸6基、土坑5基、溝3条、堀3条である。これらは藤原宮の時期の遺構と、それ以外(弥生時代、中世)に大別できる。なおその他に、調査区全域にわたって、東西、南北に多数の溝が検出されたが、これは近世以降の水田耕作に関わる溝であり、同じく近世以降の土坑もふくめて、原則として記述と図示を省略した。

藤原宮期の遺構 以下では建物、堀、井戸、土坑、溝の順に述べる。

SB8640 東区の南辺に東西方向に三個並ぶ掘立柱の柱穴で、径30～50cm、深さ10cmある。柱間は7尺で、南北棟の北妻にあたるか。

SB8645 東区の南半西寄りにある掘立柱建物。梁間2間、桁行3間の東西棟に復元できる。柱間は6.5尺等間で、柱穴は径30cm、深さ25cmである。

SB8646 SB8645の北にある掘立柱建物。梁間2間、桁行2間の南北棟で、建物の方位が北で東に振れている。柱間は梁間が5尺、桁行が6尺。柱穴は径50cm、深さ15cmである。

SB8669 西区西南隅にある掘立柱建物。発掘区の西壁と南壁に柱穴を確認できる。梁間2間以上、桁行3間以上の東西棟となるか。柱間は梁間、桁行とも5尺。柱穴は径70cm、深さ10cmと浅く、東から3個目の穴は削平されている。

SB8670 SB8669の北で、やはり西区西辺にかかる掘立柱建物(PL.4-2)。3間×2間以上の総柱建物となる。南北の柱間は6尺。東西は6.5尺。柱掘方は、今回の発掘区の中では大きいほうで、一辺75～100cmの方形ないし、径80cm前後の円形を呈する。深さは10～15cm。東側柱の南から2個目の穴は削平されている。柱穴から飛鳥IV～Vの土器が出土した。西区南半は断ち割りを行なった結果、柱穴の残りが浅く、全体に旧地表面が削平されていることがわかる。

SB8675 西区西辺中央部にある掘立柱建物(PL.4-1)。2間×2間の南北棟である。柱間は梁間5.5尺、桁行8尺ある。柱穴は径60～70cm、深さは15～20cmである。

SB8676 SB8675と重複する位置にある掘立柱建物。梁間2間、桁行3間の南北棟である。柱間は梁間7尺、桁行6.5尺ある。柱掘方はSB8675より小さく、径70cm、深さ10cm、切り合い関係からSB8676の方が新しい。

SB8680 西区西辺北寄りにある掘立柱建物。2間×3間の南北棟で、中にも柱穴がある。その大きさから見て、総柱というより、床束ないし間仕切りと見るべきであろう。柱間は梁間6尺、桁行は南2間が7.5尺、北1間が5尺ある。柱穴は径30~40cm、深さ15cmである。

SB8691 西区北辺にある掘立柱建物。2間×2間以上の南北棟か。柱間は梁間7尺、桁行は8尺である。柱穴は径30cm、深さ25cmである。

SA8660 西区北辺から東区にかけて、東西に延びる掘立柱塀である。柱間は10尺等間に復元できるが、西区の土坑SK8686と重複する部分は判然とせず、この間は10尺で割り付けることができない。柱穴の径は30~40cm、深さ20cmである。後述する東西溝SD8658と平行する位置にあることから、一連の施設の可能性がある。

SA8668 西区東辺にある南北方向の掘立柱塀。3間分を確認した。柱間は7尺で、北端の柱穴には柱根(残存長45cm、径10cm)が残っている。柱掘方の径は30~50cm、深さは20~30cm。

SE8650 東区中央付近にある井戸。掘方は径1.5mの円形で、遺構面からの深さが1.6mある。井戸枠は抜き取られている。平瓦・熨斗瓦・藤原宮期の土器などが出土した。

SE8664・8665 東区の北にある2基の井戸。当初は1基の不整形な土坑と考えて掘り下げたところ、藤原宮期を中心とした土器とともに、和同開珎銅銭が1点出土した。この最上層を除去したところ、2基の井戸が重複していることが判明した。新しい方がSE8664、古い方がSE8665である。SE8664(PL.7-1、2)は、掘方が東西1.35m、南北1.2mの隅丸方形で、深さが1.7mある。井戸枠は方形の縦板組で、各辺一枚板を用いている。上端の残りが悪く全長は不明ながら、残存長約150cm、幅約50cm、厚さ約3cmである。その底近くの内側に1辺45cmの井桁に組んだ木枠があり、中から外枠を支えている(PL.7-3)。外枠の東西2箇所にホゾを設け、それが内側の井桁の上に当たり、両者を固定させている。井戸の掘方から軒平瓦6641-Fと藤原宮期の土器が出土した。SE8665は、掘方が径2.3m、深さが1.5mある。井戸枠は抜き取られており、残存しない。埋土からは、藤原宮期の土器が出土した。

SE8689 西区中央付近の井戸(PL.7-5)。掘方は円形で径1.9m、深さが2.75mと深い。一辺60cmの方形で縦板組の井戸枠がある。縦板は一辺各3枚よりなり、1枚の長さは最も残っているもので2.3m、幅20cm前後、厚さは約3cmである。縦板の内側で、下から約三分の一ほどのところと、中ほどのところに径約7cmの丸棒を井桁に組んで、外枠を内側から支えている。埋土には軒丸瓦6273-B、熨斗瓦、人頭大の石などが含まれる。土器は大半が藤原宮期に属するが、奈良時代中期のものが少量含まれる。

SE8685 西区北半の井戸。掘方は円形で径1.3m、深さが1.4mある。掘方はすり鉢状に掘り下げているが、底のほうは周辺の地山が崩れた様子で、外側に脹らみ、断面形はフラスコ状を呈す。発掘時に便所遺構の可能性も考えたが、寄生虫卵分析の結果、そうではないことが判明し、井戸と判断した。井戸枠は抜き取られており、埋土からは軒平瓦6643-D、榛原石、藤原宮期

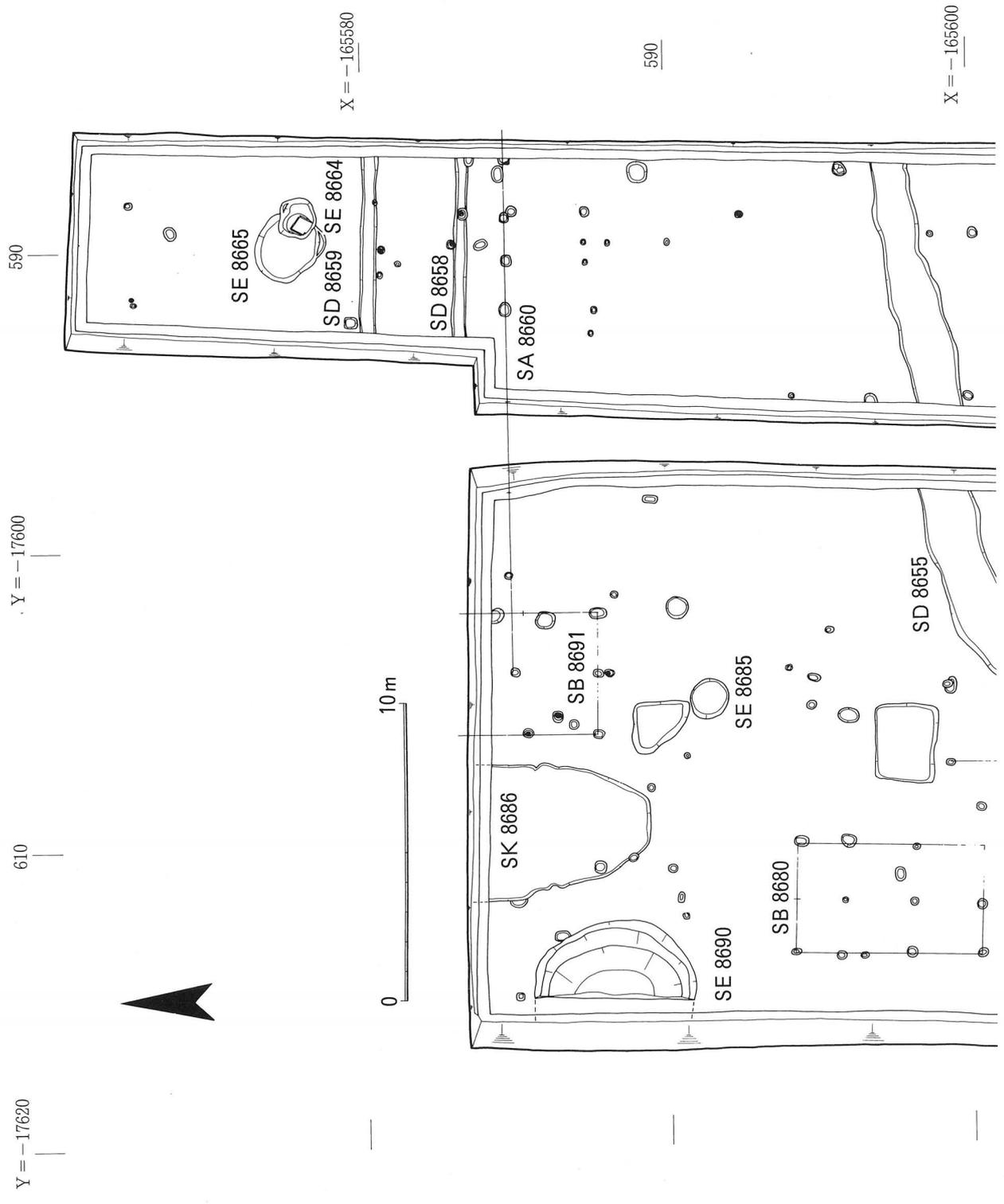
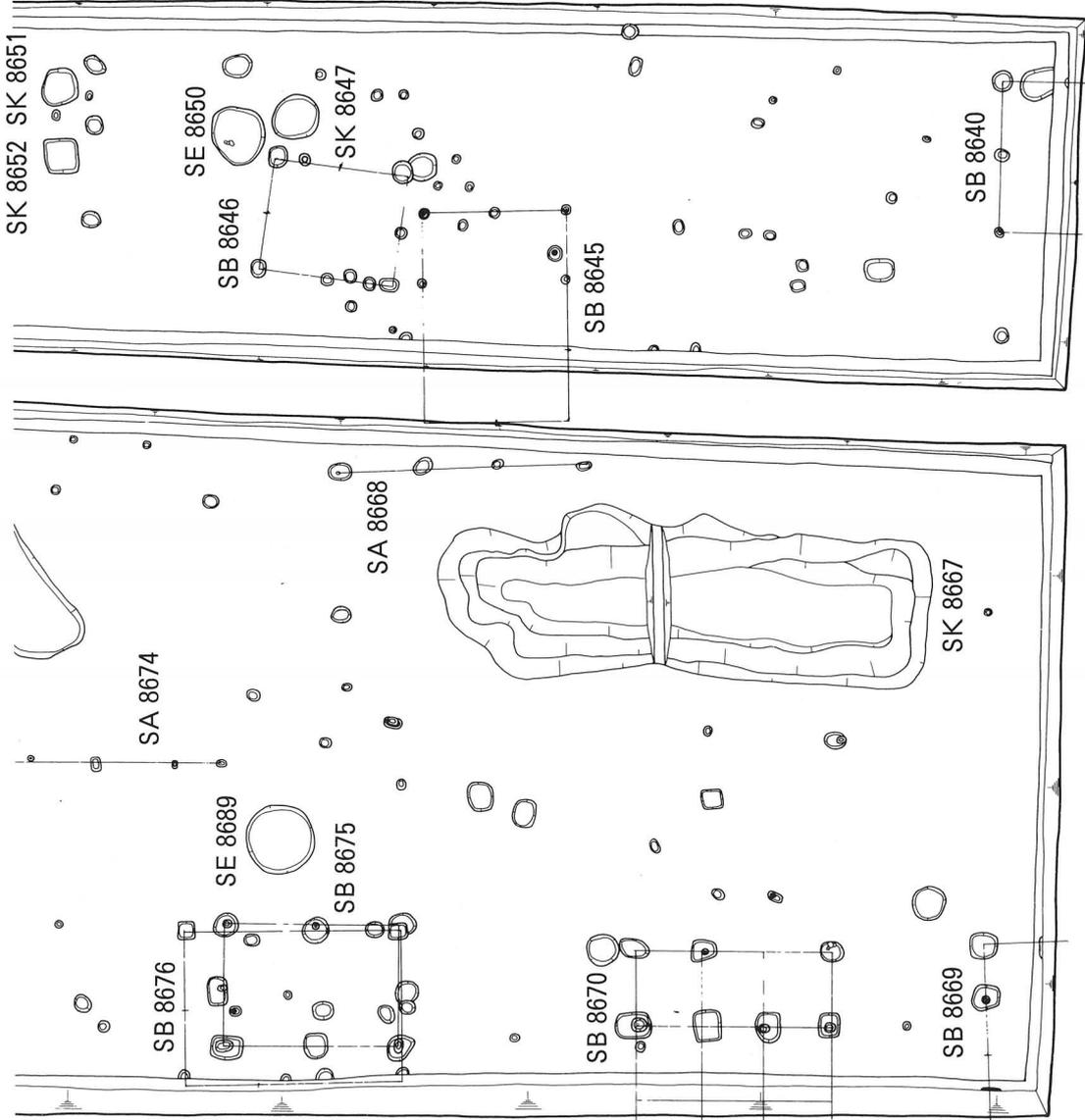


fig. 6 第81次調査遺構図



610

X = -165620

から奈良時代前半の土器などが出土した。

SE8690 西区北西端の井戸 (PL. 6 - 1)。東半分を掘りあげたが、規模は径5.3m、深さが1.4mある。井戸枠は抜き取られている。埋土から熨斗瓦の他、多数の土器が出土した。土器の大半は藤原宮期であるが、奈良時代前半のものも若干混じっている。

SK8647 東区中央やや南寄りにある円形の土坑。径1.2m、深さ20cmである。

SK8651 東区中央東にある円形の土坑。径1.0m、深さ15cmである。

SK8652 SK8651の西にある方形の土坑。一辺1.0m、深さ10cmと浅い。

SK8686 西区北辺にある長楕円形の土坑。東西が4.5m、南北は5.7m以上になる。深さ15cmと浅いが、藤原宮期の土器が多く出土した。

SD8658 東区の北にある東西溝。幅40cm、深さ15cmである。

SD8659 SD8659の北でこれと平行して流れる東西溝 (PL. 5 - 2)。幅50cm、深さ10cmである。発掘区の全面にわたって検出した多数の溝のうち、この2条のみを古代に遡ると考えたのは、一つはその埋土の特徴である。他の耕作用溝の埋土が暗灰粘質土ないし黄褐粘質土であるのに対して、2条の溝はともに暗茶褐土であり、やや砂質土に近い。また、遺構の切り合い関係でも、当然ながら周囲の耕作溝に切られている。遺物は、土師器の小片が1点のみであり、断定はできないが、その方位が正東西であること、両者の間隔が溝の心々間で10尺となることなども根拠となる。これらが古代の遺構だとすると、坪の中を区画する溝の可能性がでてくる。前節の検討によれば、一条条間路・横大路の心々距離は約142.8mとなり、坪の南北心は、一条条間路から北に71.4mの位置にくる。これは、SD8658の0.3m南にあたっており、ほぼ坪を南北に二等分していると言える。また、SD8658の南1.5mに溝と平行する掘立柱塀 SA8660についても同様で、南の区画の北辺の塀と見ることもできよう。

藤原宮期以外の遺構 弥生時代の溝と中世の大土坑および塀がある。

SD8655 西区中央付近から東区を横切り、さらに東にのびる溝状の遺構である (PL. 6 - 2)。ただし、西端は急な傾斜で立ち上がっており、止まっている。溝幅1.5～2m、深さは70～80cmある。溝の堆積土は四層に大別できるが、その最上層の黒灰褐土から、多くの弥生式土器が出土した。下三層からはほとんど遺物が出土しなかった。

SK8667 西区東南にある楕円形の大土坑である (PL. 7 - 4)。南北13.5m、東西4.5m、深さは1.0mある。埋土は暗灰色ないし灰褐色の粘土である。遺物は少なく、遺構の性格や年代を確定しがたいが、わずかに瓦器が出土したことから、土壌分析の結果、藤原宮期の井戸 SE8685とは周囲の環境が大きく異なるということから、この大土坑は中世に降る遺構と推定した。水溜用の施設かとも思えるが、性格についてはなお不明である。

SA8674 西区中央付近にある南北方向の掘立柱塀。4間ある。柱間は若干不揃いであるが約6尺である。柱穴は径20cm、深さ5cmしか残っていない。柱穴の一つから瓦器が出土した。